

三ツ寺・猿府遺跡

— 携帯電話用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2009

高崎市教育委員会

三ッ寺・猿府遺跡

— 携帯電話用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2009

高崎市教育委員会

例 言

1. 本書は、KDDI株式会社の携帯電話用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書の遺跡名は「三ツ寺・猿府遺跡」である。高崎市遺跡番号はNo.454である。
3. 本遺跡の所在地は、群馬県高崎市三ツ寺町字猿府749番地1である。
4. 発掘調査は、開発電子技術株式会社との鉄塔建設工事に伴い、埋蔵文化財の記録保存が必至となったため行うこととなった。
5. 発掘調査及び整理作業から本報告書の刊行までの費用は、開発電子技術株式会社の負担で行った。
6. 調査体制は、以下の通りである。

高崎市教育委員会文化財保護課 田口一郎・須田余保子・角田真也
有限会社 高澤考古学研究所 高階敏昭

調査面積 14.44㎡

発掘調査期間 平成21年10月2日～平成21年10月7日

7. 本書の編集作業は高階敏昭が行った。執筆は1が高崎市教育委員会の田口一郎、その他を高階敏昭が行った。
8. 発掘調査・整理作業に伴い、各作業を以下のとおり委託した。
 - ・水準点測量作業は澤田福宏・高階敏昭で行った。
 - ・遺物の写真撮影作業は山際哲幸に委託した。
9. 発掘調査及び整理作業に従事された作業員は以下のとおりである。(敬称略、50音順)
岡田勝・川端貞雄・斉藤昭男・小林貴子・澤田美枝子・澤田恵英・古川光忠
10. 本書作成にあたり多くの方々のご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。(敬称略、50音順)
開発電子技術株式会社・澤田修・高階宣男
11. 本調査で収集した資料及び出土遺物は一括して高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図『前橋・高崎』、国土地理院発行の1/2,500高崎市都市計画基本図を使用した。
2. 遺構平面図の北方向は磁北を使用した。水準線は標高を示す。
3. 本書に掲載した各遺構図、遺物実測図、遺物写真の縮尺は各図下に記載した。
4. 遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版標準土色色帖』を使用した。
5. 実測土器の中で口縁部の残存率が1/2未満の為、復元実測をしたものは、土器内面の口縁部線を中軸線から離して実測図を作成している。
6. 遺物観察表の計測値の〈 〉は残存値を表す。
7. 遺物番号は、図面・写真図版、観察表ともに統一してある。
8. 本報告書の本文、土層注記で使用した火山噴出物は、浅間A軽石：As-A、1783年降下。浅間B軽石：As-B、1108年降下。浅間C軽石：As-C、3世紀後半。
9. 第4図：全体図で使用したトーンの塗りは、試験調査で確認した住居に使用した。

目次

例言

凡例

目次

I. 調査に至る経緯	1
II. 調査の方法と経過	1
III. 遺跡の立地と環境	2
IV. 調査の成果	4
抄録	7
参考文献	7
写真図版	

挿図目次

第1図 周辺遺跡図	3
第2図 遺跡位置図	4
第3図 遺跡全体図	5
第4図 本調査区 第1面 畠跡平・断面図	6
第5図 遺物実測図	7

表目次

第1表 遺物観察表	7
-----------	---

写真図版目次

Pl. 1	1面	1号畠跡(1~3号溝)	全景	西から
	1面	1号畠跡(1~3号溝)	調査区東壁セクション	西から
	1面	1号畠跡(1~3号溝)	調査区西壁セクション	東から
	2面	VI層遺物包含層	全景	西から
	2面	VI層遺物包含層	調査区南壁セクション	北から
		作業風景		南東から
		出土遺物写真		

I. 調査に至る経緯

平成 21 年 3 月、開発電子株式会社（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に携帯電話用基地局（KD D I）予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地周辺には上越新幹線建設に伴い調査された井出・村東遺跡が所在し、弥生～中近世に至る散布地として遺跡台帳・地図に登録された埋蔵文化財包蔵地であるため、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年 4 月 8 日付けで土地所有者である齋藤文夫氏より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年 5 月 25 日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳～平安時代の堅穴住居跡と推定される 3 基の遺構を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行った結果、遺構密度が希薄と推定される北東に設置位置を移動すると共に、掘削規模を縮小する変更計画が提示された。この部分については再度の試掘調査に替り、事業者により重機の提供を受けて立会調査を行い、遺構が確認された場合には、本調査を実施することで合意された。

8 月 19 日に行われた立会調査により平安時代の遺構・遺物が確認されたため、上記の合意に基づき、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定による届出に対する回答で、記録保存の発掘調査が必要であると指示を出した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社高深考古学研究所に委託して実施することとなり、平成 21 年 10 月 1 日付けで高崎市長・事業者・高深考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成 21 年 10 月 1 日付けで事業者と高深考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。

II. 調査の方法と経過

1. 調査の方法

試掘調査では、開発対象区域に 1～3 トレンチ（合計 14.7 m²）を設置し精査したところ、現地表面下 40～60 cm の平安時代面で住居跡を 2 軒、また、地表面下 50～90 cm の古墳時代面で 1 軒の住居跡を検出した。予定通り工事が行われた場合、これら埋蔵文化財が破壊されることを報告したところ、より埋蔵文化財の包含の可能性が低い河川寄りの場所（当初計画の北東隣接地）に建設予定地を変更することとなった。それを受けて同年 8 月 19 日、立会調査を行い、掘削部分（14.44 m²）を面的に剥いだ状態を観察した結果、現地表面下約 20 cm の暗褐色土面（Ⅱ層上面）で近世以降と考えられる溝を 3 条、また地表面下約 35 cm の黒灰色シルト面（Ⅵ層上面）で平安時代の住居跡の可能性が考えられる遺物包含層を検出したため工事を一時中断し、保存に向けた協議を行った。その結果、建設予定地となった 14.44 m²部分について本調査を行うこととなった。

表土除去作業は、重機を使用し、残土は調査区脇に排土置場を設定した。遺構確認はジョレン等で行い、遺構の掘り下げは移植ゴテを基本とし、適時必要に応じてジョレン・スコップを使用した。調査は、遺構毎に土層の観察を行うため、ベルトを設定して掘り下げ作業を行った。遺構は掘り込み面または、確認面を把握する為、調査区壁で上層の観察を行った。遺構平面図は平板測量で行った。覆土中の遺物は遺構毎に一括で取り上げた。写真撮影は 35 mm カラーリバーサルフィルム、同モノクロフィルム、デジタルカメラの 3 種類を使用した。

2. 調査の経過（平成 21 年 10 月 2 日～10 月 7 日）

平成 21 年 10 月 2 日 発掘調査を開始する。発掘器材・資材等の搬入、安全対策作業を行う。第 1 面で溝 3 条を確認し掘り下げ作業を行う。随時、遺構の写真撮影、セクション図の作成を行う。

10 月 5 日 第 2 面目の調査を開始する。包含層の掘り下げ作業を行う。随時、写真撮影、セクション図の作成を行う。

10 月 6 日 平安時代の包含層の掘り下げ作業を行う。基本堆積上層の観察を行う。随時、写真撮影、平面図・セクション図の作成を行う。調査を終了する。

10 月 7 日 発掘器材・資材等の撤収作業を行う。発掘調査の全行程を終了する。

Ⅲ. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

本遺跡は、高崎市役所から北に約 10 kmの高崎市三ツ寺町字猿府 749 番地 1 に所在し、井野川水系の一つでもある猿府川によって開析された低台地上に位置する。本遺跡周辺の地形を見ると、標高 120m の相馬ヶ原扇状地の扇端部に位置しているため、湧水が豊富で、扇状地の地下水を水源とする井野川、唐沢川、猿府川等の中小河川が扇状地を深く削り、前橋・高崎台地へ流れ込んでいる。このような環境を造り出した相馬ヶ原扇状地は、14,000 年前の榛名山の火山活動に起因する山体崩落によって起こった「陣場岩屑なだれ」の堆積によって形成されている。標高約 110~120m 前後を境に、南は高崎台地と、東は前橋台地と接する。現在遺跡地周辺の土地利用を見ると、猿府川左岸は土地区画整理事業が進み、新興住宅地となっているが、本遺跡が立地する右岸域は田畑が広がっている。

2. 歴史的環境

縄文時代は標高 150 m 以下の地域で広く遺跡が分布する。早期～晩期にかけて確認されているが、特に中期（加曾利Ⅰ式）の遺跡が多く、西浦北遺跡（35）、保渡川遺跡（34）では中期～後期の住居が確認されている。

弥生時代の遺跡は、中小河川の流域や開析谷の台地上に多く分布する。上に旧群馬町の南西部に遺跡が多く、西浦北遺跡（35）や西浦南遺跡（13）では大集落が確認されている。

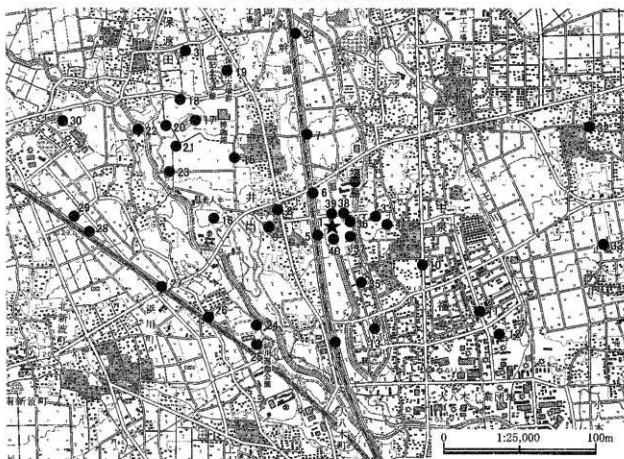
古墳時代前期の集落は保渡川Ⅶ遺跡（18）、熊野堂Ⅰ・Ⅱ遺跡（14）で確認されている。中期は井野川、猿府川、唐沢川流域の低台地上や低地上に数多くの遺跡が分布し、この時期に爆発的に集落が増加する。本遺跡（1）が立地する猿府川の右岸沿いには、豪族居館で知られる三ツ寺Ⅰ遺跡（6）がある。その周辺には、豪族居館とほぼ同時期の集落である中林遺跡（2）、井出村東遺跡（5）、熊野堂遺跡Ⅰ・Ⅱ遺跡（14）が存在する。後期も基本的に同様な分布域を示し、三ツ寺Ⅰ遺跡（6）、三ツ寺Ⅱ遺跡（7）、井出村東遺跡（5）、中林遺跡（2）、三ツ寺大下Ⅳ遺跡（36）、三ツ寺大下Ⅴ遺跡（37）、三ツ寺猿府井出村東遺跡（39）、村東Ⅱ遺跡（40）で集落が確認されているが、古墳時代終末期から奈良時代にかけての集落は減少する傾向にある。生産遺構は、集落域が拡大すると共に生産遺構もその面積を増し数多く確認されている。井野川、猿府川、唐沢川の豊富な水資源を利用してその流域の低台地上や低地帯を中心に広く分布し、本遺跡周辺では西浦北遺跡（35）、熊野堂Ⅰ・Ⅱ遺跡（14）、榎原Ⅰ遺跡（4）、榎原Ⅱ遺跡（3）、三ツ寺Ⅱ遺跡（7）、井出村東遺跡（5）で水田が確認されている。また、同遺跡（16）では榛名山の度重なる火山噴火で大打撃を受けながらも水田を復旧させ、古墳時代～平安時代にかけて継続的に水田耕作が行われている。畠は集落とセット関係で確認されることが多く、三ツ寺猿府井出村東遺跡（39）では H-r-F-A で埋没する畠とほぼ同時期の住居が確認されている。古墳は、5 世紀後半～6 世紀初頭にかけて造営された井出二丁山古墳（17）、保渡川八幡塚古墳（19）、保渡川葉師塚古墳（31）が井野川左岸流域の台地上を占地している。この古墳群は全長が 100 m を超える前方後円墳で、狭い範囲に連続的に造営されている。その後、後出する 6 世紀以降の古墳は諸口古墳（12）、愛宕塚古墳（30）等が確認できるが、共に円墳で首長層を匂わせる大型古墳は確認されなくなる。

奈良・平安時代は、本遺跡の東約 4 km に、8 世紀に造営された上野国府、国分僧寺、国分尼寺が設置される。その南方には東山道国府ルートが東西に伸び、本遺跡地の約 700 m 南を東西方向に通過している。本遺跡地を含めた地域は律令体制の政治・文化の中心地であり、周辺には数多くの遺跡が存在し、中林遺跡（2）、井出村東遺跡（5）、三ツ寺Ⅱ遺跡（7）、御布呂遺跡（25）、菅谷遺跡（32）、保渡川遺跡（34）、三ツ寺大下Ⅳ遺跡（36）、三ツ寺藤原下遺跡（38）、三ツ寺猿府井出村東遺跡（39）で集落が確認されている。特に、本遺跡の東約 100 m の三ツ寺人下Ⅳ遺跡では、約 60 軒の大集落が確認されている。集落が拡大すると共に生産遺構も各地で確認されるようになり、井野川流域の低台地上に位置する同遺跡（16）、芦田貝戸遺跡（24）、猿府川流域の低台地上に位置する熊野堂Ⅰ・Ⅱ遺跡（14）、唐沢川流域の低台地上に位置する中林遺跡（2）では、平安時代の水田が確認されている。

中・近世は、室町時代に入野国守護代の長尾氏が築いた茶海城（上野国府跡）の支配下であった。その後、長尾氏の衰退とともに勢力を伸ばしてきた箕輪城の長野氏による勢力下となる。遺跡周辺には、中泉砦跡（10）、花城寺館跡（21）、元井出館跡（23）、浜川館（27）、菅谷城跡（32）等の城跡が存在する。また、三ツ寺Ⅱ遺跡（7）や保渡川Ⅶ遺跡（18）からは館の礎と土塁が、井出村東遺跡（5）からは土壇群を囲む溝から五輪塔や板碑が出土している。



高崎市庁舎からの遠景写真



第1図 周辺遺跡図 (1/25,000)

1. 三ッ寺・猿狩遺跡
2. 中林遺跡
3. 権現原Ⅱ遺跡
4. 権現原Ⅰ遺跡
5. 井出村東遺跡
6. 三ッ寺Ⅰ遺跡
7. 三ッ寺Ⅱ遺跡
8. 賢野坊古墳
9. 御庫山古墳
10. 中泉壱跡
11. 諸口遺跡
12. 諸口古墳
13. 西浦南遺跡
14. 熊野堂Ⅰ・Ⅱ遺跡
15. 井出地区遺跡
16. 同道遺跡
17. 保渡田八幡塚古墳
18. 保渡田遺跡
19. 井出三子山古墳
20. 井出北畑遺跡
21. 花城寺館跡
22. 道場谷津遺跡
23. 元井出館跡
24. 芦貝Ⅰ遺跡
25. 御布呂遺跡
26. 新井貝戸遺跡
27. 浜川館
28. 浜川高田遺跡
29. 浜川長町遺跡
30. 愛宕塚古墳
31. 保渡田薬師塚古墳
32. 香谷城跡
33. 正観寺遺跡
34. 保渡田遺跡
35. 西浦北遺跡
36. 三ッ寺大下Ⅳ遺跡
37. 三ッ寺大下Ⅴ遺跡
38. 三ッ寺藤塚道下遺跡
39. 三ッ寺鎮府井出村東遺跡
40. 村東Ⅱ遺跡



第2図 遺跡位置図 (1/2,500)

IV. 調査の成果

本報告書では試掘調査の1～3トレンチ(合計14.7㎡)で確認した遺構、遺物と、本調査区の調査結果を合わせて報告する。確認した遺構は、本調査区が近世以降の扇跡(溝3条)と平安時代の包含層で、試掘調査が古墳時代中期の住居1軒、平安時代の住居2軒、平安時代の包含層である。

扇跡について

本調査区の第1面調査で、東西方向に並行する3条の溝を確認した。この溝は、幅が45～55cm、深さ25～30cmで、断面形状は台形状となり、底面には幅25cm程の平坦面がある。この特徴から溝部分がサクになる扇跡と判断した。畝間はサクの上端間で約120cmあり「広畝」である。扇跡の範囲は、南西に位置する試掘調査で扇跡が確認されていないため南側へ延びる可能性は少ないと思われる。廃絶時期は覆土中に浅間A・B軽石が少量混入すること、II層上面で遺構が確認されていることから、近世以降の扇跡と思われる。

包含層について

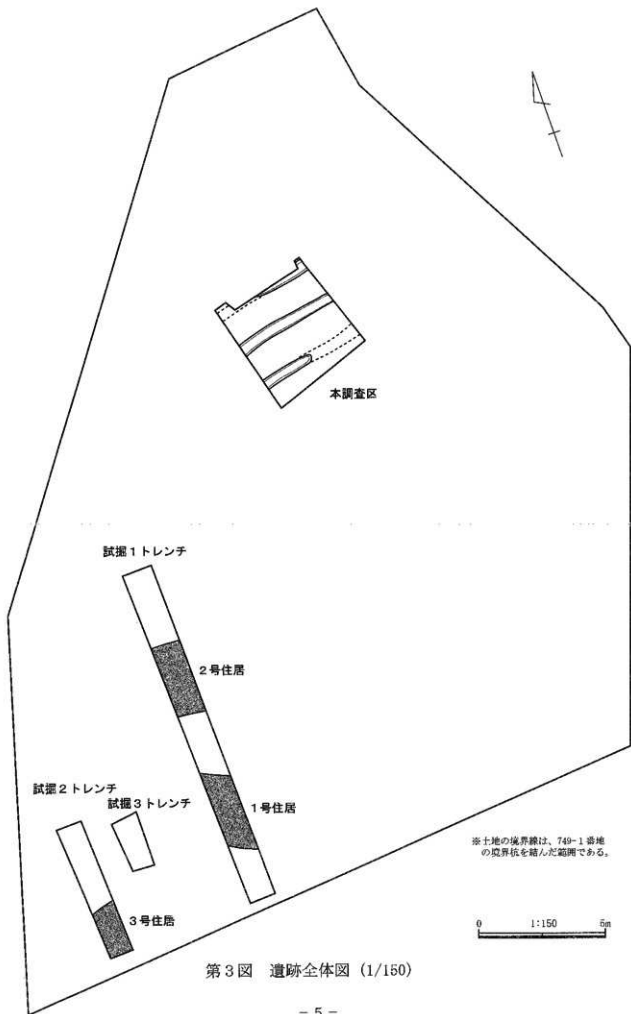
本調査区第2面と試掘調査2トレンチ北側で平安時代の包含層を確認した。この包含層は第VI・VII層の黒灰土粘質土の腐植層で、本調査区の全面で確認されている。厚さは約20～50cmで、当時の地形のうねりに沿って堆積は均一ではない。遺物は平安時代の土師器杯・甕片や須恵器杯片が主体であるが、極少量古墳時代の土師器が混入する。出土した土師器の殆どは磨滅した碎片で器種を特定できない。その内、6世紀前半の土師器鉢片(3)、5世紀末～6世紀初頭の土師器杯片(4)、9世紀前半の須恵器碗片(5)は資料化が可能であった。

住居について

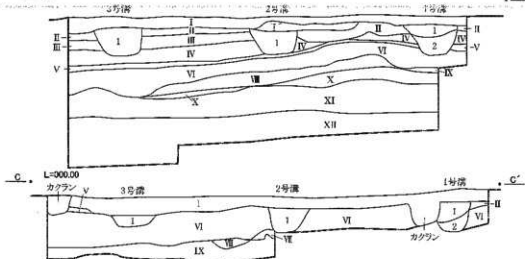
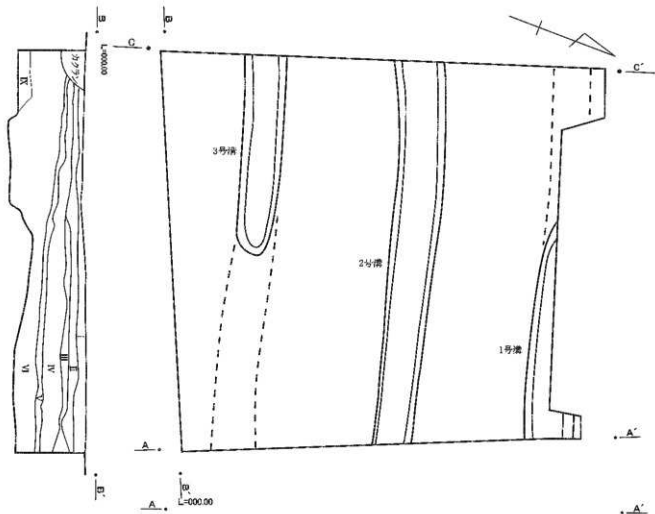
試掘調査で3軒の住居を確認した。1トレンチ南側では古墳時代中期の1号住居を、その北側で平安時代の2号住居を確認した。2トレンチでは南側で平安時代の3号住居を確認した。3トレンチは遺構・遺物は確認されなかった。遺物は、1号住居から5世紀末～6世紀初頭の土師器杯(1)が、3号住居から9世紀前半の須恵器杯(2)が出土している。

周辺遺跡との関係について

本遺跡は猿狩川の右岸沿いの低台地上に位置する。この河川の流域沿いには多くの発掘調査事例があり、南の野野堂遺跡から北の三ツ寺II遺跡までの帯状の範囲に4世紀～11世紀の集落や生産域が分布する。猿狩川上流域には、5世紀後半～6世紀初頭まで営まれた三ツ寺I遺跡の豪族居館を中心とした一大集落が展開されており、周辺には、同時期の集落である井出村東遺跡、三ツ寺II遺跡、中林遺跡が存在する。本遺跡はこれらの集落に近接し、同時期である5世紀末～6世紀初頭の遺物が出土した1号住居が確認されていることから、これらに近接する集落の一端と考えたい。また、本遺跡は試掘調査で平安時代の住居が2軒確認されている。本調査区の北隣接地に位置する三ツ寺猿狩井出村東遺跡や、三ツ寺藤塚道下遺跡では同時期の集落が確認されており、同一集落の可能性が考えられる。



第3図 遺跡全体図 (1/150)



- 基本地層(層)
 I層 黒褐色土
 II層 暗褐色土
 III層 暗褐色土
 IV層 灰色土
 V層 黒粘質土
 VI層 黒粘質土
 VII層 黒粘質土
 VIII層 黒粘質土
 IX層 黒灰色砂質土
 X層 黄白色シルト
 XI層 黄白色シルト

耕作土。
 耕作土。

1号墳SPA
 1. 暗褐色土、しまり、粘性、やや弱、浅間A・B軽石を微量含む。
 2. 暗褐色土、しまり、粘性、やや弱、浅間A・B軽石を微量含む。

3号墳
 1. 暗褐色土、しまり、粘性、やや弱、浅間A・D軽石を少量含む。遺構跡面である。しまり、粘性、普通。浅間C軽石をやや多く含む。西側は比較的薄い地層。
 2. 暗褐色土、しまり、粘性、強。浅間C軽石を少量含む。平安時代の遺物も含層である。しまり、やや強、粘性、やや弱、細粒。浅間C軽石を少量含む層。X層を面状にやや多量に含む。平安時代の遺物も含層である。しまり、やや強、粘性、やや弱、X層とVII層との混土層。しまり、粘性ともに強。



第4図 本調査区第1面島跡 平・断面図 (1/40)



第5図 遺物実測図 (1/3)

第1表 遺物観察表

遺物名	種別	群集	出土層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調査・文様等	色調	産地	胎土	残存率	備考
1	1号住居	土師器	坪	—	12.3	—	6.3 内面 口縁部コナチ、底部へラケズリ。 内面 口縁部コナチ、底部ヒケナ。	にぶい褐色	良好	黄褐色・白色粒子	約2/3	
2	2号住居	須恵器	坪	—	12.4	—	3.1 口ウ成形、内外面 口縁部一帯磨面コナチ。 赤紫黒胎土切り、加減造。	灰色	良好	白色粒子	口縁部一帯磨面	
3	包含層	土師器	群	須恵	—	—	2.7 内面 口縁部コナチ、底部へラケズリ。 内面 口縁部コナチ。	にぶい褐色	良好	黄褐色・白色粒子	口縁部片	磨面
4	包含層	土師器	坪	須恵	—	—	3.1 内外面 口縁部コナチ。	にぶい褐色	良好	黄褐色・白色粒子	口縁部片	磨面
5	包含層	須恵器	群	須恵	—	—	6.4 口ウ成形、内外面 口縁部一帯磨面コナチ。	灰色	良好	白色粒子	口縁部片	

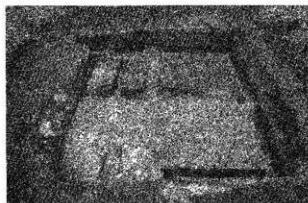
報告書抄録

ふりがな	みつでら さるふいせき							
書名	三ツ寺・猿府遺跡							
副書名	携帯電話用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第253集							
編著者名	有限会社 高澤考古学研究所 高階敏昭							
編集機関	高崎市教育委員会							
所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1							
発行年月日	西暦2009 (平成21年) 年12月25日							
所収 遺跡	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三ツ寺・猿府遺跡	高崎市 三ツ寺町 半猿府749 番地1	102020	454	36° 37' 26"	138° 99' 36"	20091002 ～ 20091007	14.14㎡	鉄塔建設
所収 遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
三ツ寺・猿府遺跡	集落	古墳	住居 1軒 (鉄掘調査)	土師器				
		平安	住居 2軒 (鉄掘調査)	土師器・須恵器				
	包含層	平安	2面:包含層 (木調査)	土師器・須恵器				
	牛込遺構	近世以降	1面:崩落 (木調査)	遺物なし				

参考文献

- 2001『群馬町誌・通史編上』 原始・古代・中世・近世 群馬町誌刊行委員会
 1995『群馬町誌・資料編4』 自然 群馬町誌刊行委員会
 下城 正・女塚和志雄・右島和夫・井上唯雄・外山成子ほか 1988『三ツ寺1遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 川辺秀昭 2001『依佐田徳昌寺前遺跡、三ツ寺大下IV遺跡』 群馬町教育委員会
 清水 豊 2004『足門寺屋敷Ⅲ、三ツ寺大下V遺跡、保原田薬師城古墳』 群馬町教育委員会
 大賀 達・中島 博・井上荘之助 1983『井出村東遺跡』 群馬町井出村東遺跡調査会

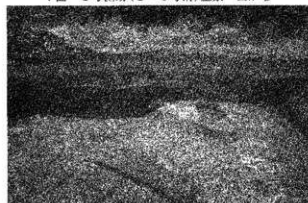
写 真 图 版



1面 1号吊跡(1~3号溝)全景 西から



1面 1号吊跡(1~3号溝)調査区東壁セクション 西から



1面 1号吊跡(1~3号溝)調査区西壁セクション 東から



2面 VI層遺物包含層 全景 西から



2面 VI層遺物包含層 調査区南壁セクション 北から



作業風景 南東から



1



2



3



4



1(裏面)



5

—三ッ寺・猿府遺跡—

高崎市文化財調査報告書253集

平成21年12月21日 印刷

平成21年12月25日 発行

編集・発行 高崎市教育委員会
印刷・製本 朝日印刷工業株式会社